

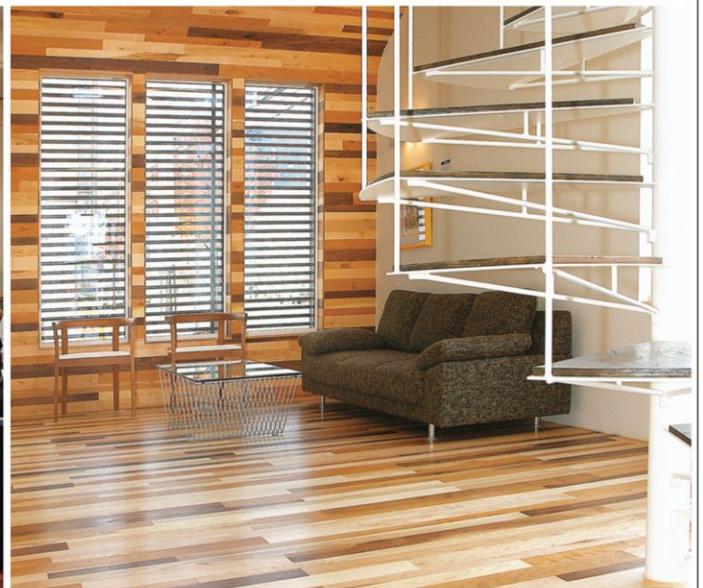


US HARDWOOD INFORMATION No.33

May, 2019

American
Hardwood
Export
Council
(AHEC)

c/o American Consulate General 2-11-5 Nishitenma, Kita-ku, Osaka, 530-0047, Japan





IFFT interiorlifestyle living in Tokyo 2018 アメリカ広葉樹と九州の家具産地

アメリカ広葉樹輸出協会(AHEC)は、2018年11月14日(水)~16日(金)の3日間に渡り東京ビッグサイトで開催された「東京国際家具見本市 (IFFT interiorlifestyle living 2018)」に出展参加しました。今年は「アメリカ広葉樹と九州の家具産地」のテーマで福岡県の大川と朝倉、佐賀県諸富、大分県日田、宮崎県都城の九州の5つの家具産地の15社がアメリカ広葉樹を用いて製作した家具を展示しました。

日本では珍しく近隣に豊富な森林資

源を持たない福岡県大川地域がなぜ生産量日本一の家具産地になったのか？そこには、九州最大の一級河川筑後川の存在がありました。しかも都城を除く4産地は筑後川つながりです。当時の大川は、筑後川上流の木材産地、大分県日田より川を下ってくる木材の集積地で、その木材を船大工の技術で加工したのが始まりといわれます。その後、戦後の木工ブームの中で、1955年に元熊本県工業試験場長の河内諒氏がデザインした金具なし、引き手なしのタン

スが人気を集め、大川の名を全国に知らしめました。一方、筑後川対岸の佐賀県諸富も古くから家具作りが盛んでしたが、1955年の筑後川にかかる大川橋・諸富橋の開通後、手狭になっていた大川からの企業の移転の増加により本格化、現在は大川に次ぐ九州第2位の産地となっています。木材産地だった大分県の日田市は1907年から行われた豊富な森林資源を活用した技術者養成が、戦後に花開き国内有数の脚物家具産地となりました。南九州の豊富



シキファニチア株式会社/福岡県朝倉市



ナガノインテリア工業株式会社/福岡県朝倉市



野中木工所/福岡県大川市



広松木工株式会社/福岡県大川市



株式会社 河口家具製作所/福岡県柳川市



株式会社 ヒラシマ/福岡県柳川市



株式会社 アサヒ/大分県日田市 + 株式会社 橋詰家具/宮崎県都城市

な森林資源を活用した宮崎県都城市の家具製造も、戦後大きく発展、近年は家具からインテリアとしての生活提案を進めています。

昨今のインテリアへの関心の高さに対応して従来の家具単体から空間を意識したブランドへと、同一産地内はもちろん異なる産地のメーカーがコラボレーション、それぞれ得意分野の家具を作り一つのブランドを創出するという試みも見られました。

15社から展示されたベッド、チェスト、テーブル、椅子からコート掛けなどの多岐にわたる家具には、いずれも「アメリカ広葉樹合法性証明」または「アメリカ広葉樹環境プロファイル」の証明が確認されたアメリカ広葉樹材が用いられています。アメリカ広葉樹の木目や木肌の美しさはもちろん、日本のクリーンウッド法やEU木材規制にも対応した合法性の確認された材であると共に優れた森林管理により安定供給が可能な材であることを来場者にアピールしました。

14小間の広いブースにはアメリカ広葉樹の立木をイメージした3本のモニュメントを設置、通路で左右に分断されたブースをうまく一体化しました。モニュメントツリーの幹には当協会のメンバー企業であるノースウエストハードウッド社(Tacoma,WA)から寄贈されたアメリカ広葉樹製材をアレンジすることでアメリカ広葉樹林の豊かさを表現しました。

会期中の11月15日(木)にはヒルトン東京お台場で出展者をはじめ家具業界、木材業界の関係者、報道陣を招いてレセプションを開催。九州各地からの参加者と熱心な意見交換が行われました。



レインボーブリッジを背景に九州の家具産地の皆さんと記念撮影



株式会社丸庄/福岡県大川市



丸田木工 株式会社/福岡県大川市



株式会社 モーブル/福岡県大川市



モリタインテリア工業株式会社/福岡県三浦郡



株式会社新象/大分県日田市



有限会社 平田椅子製作所/佐賀県佐賀市 + レグナテック 株式会社/佐賀県佐賀市





「アメリカ広葉樹建築家セミナー」 名古屋で10年振りに開催

アメリカ広葉樹輸出協会 (AHEC) は、2018年6月27日(水)「アメリカ広葉樹建築家セミナー」を名古屋市内のホテルにて開催しました。名古屋では10年振りとなる開催でした。

今回のセミナーでは「木材の可能性を考える」というテーマのもとに米国の広葉樹製材等級検査官、インテリアデザイナー、日本の木構造の専門家、塗装の専門家の4人による講演を行いました。

在名古屋米国領事館のゲリー・シェファー首席領事の挨拶の後、昨年福岡と静岡で開催した「アメリカ広葉樹等級格付けワークショップ」で講師を務めた全米広葉樹製材協会 (NHLA) 主席等級検査官のデナ・スペサート氏が「米国広葉樹インテリア市場に基づく最新の広葉樹製材等級格付」について説明。

等級格付は製材から木取りできるカッティングの寸法と数を基本としている。本来は家具での使用を想定し、クリアで欠点のない材の歩留まりによって各等級が決まる。「FAS」、「F1F」などの上級材からは長尺のクリア材が取れるが、コモン等級では短尺のクリア材の木取りが想定されている。言い換えれば等級はクリア材の歩留まりを表すもので、材面の全体的な外観を反映するものではない。今後さらに持続可能である木材の価値を引き出すため、コストと歩留まりの両面でコモン等級の活用を進めることが大切である。また、格付製材の購入にあたっては、まず材の使用目的、そしてグレーディングなど広葉樹製材のルールを知ること、最後に木材販売会社との十分なコミュニケーションが重要と指摘した。

次いで講演した米国シアトル在住のインテリアデザイナーでNKウッドワーキング&デザインの代表であるネイシー・カツオフ氏は、「米国高級インテリア市場でのアメリカ広葉樹のユニ-

クな活用法』を紹介した。

造船業を経た後、金属、ナイフ、ガラス、クラフトと素材を活かす仕事に就き、デザイン追求から現事務所を設立。高級インテリア市場で豪華な階段や家具、建築アートなどを手掛け高い評価を得ている。エッフェル塔を木で建てるのが夢という同氏は「デザインする上で大事にしていることは自然界からのインスピレーションと素材の持つ内なる美、を活かすこと。木材は自然にそびえ立つ木と同様の美しさが備わっているかどうか」が作品の基準なのだという。スライドによりホワイトオークの邸宅用階段やカウチ・テーブル、ウォルナットとアフリカ産のサペリによるバスタブなどの作品を紹介、斬新なデザインが注目を集めた。

休憩後、講演された東京大学生産技術研究所の腰原幹雄教授の「森と都市の共生、いろいろな木を使う」については右頁に講演の要約を掲載しています。

最後は木材塗装研究会運営委員の長澤良一氏の「広葉樹の魅力を活かす塗料と塗装」と題する講演。木材塗装の豊富な経験を生かし詳しく説明された。中でもハードメープルやアッシュの白木塗装での濡れ色対策に水性クリア塗装の推奨や濡れ色を防いで手脂などを付着させない技術の解説には関心の高い参加者からの質問も多かった。



斬新なデザインのカツオフ氏のバスタブ(上)と階段(右)

講師のプロフィール

Nathie Katzoff
ネイシー・カツオフ
インテリア・デザイナー



NK Woodworking & Design の創業者でオーナー兼デザイナー。世界中でやる気と畏敬の念を起させる美とスタイルを感じる仕事で壮麗な階段や家具、建築アートなどを製作。木製ボートや建築アート製作に関連した興味のある30の仕事を開発。階段や家具、浴槽といった形で機能的な木製彫刻のデザインと製作をしている
[受賞] 2014年、2015年、2016年、2017年と北米の先進的な階段製造業者組織である階段製造業協同組合から最優秀階段賞を受賞

Dana Spessert
デナ・スペサート
全米広葉樹製材協会主席等級検査官



家族が製材所を経営していたことから等級検査官の仕事に就き、以来28年以上にわたり広葉樹製材等級検査官を務める。2010年からは全米広葉樹製材協会の主席等級検査官として、多くの製材会社、建築家、家具メーカー、また世界中の広葉樹の関係者に対し全米広葉樹製材協会の等級格付について説明している。スペサート氏の広葉樹製材等級検査官としての経験とノウハウは米国広葉樹業界内でも卓越している。

長澤 良一
Ryoichi Nagasawa
木材塗装研究会運営委員



1946年11月川崎市生まれの東京育ち。1968年芝浦工業大学工業化学科卒業。木材用塗料メーカー、ユニオンペイント株式会社入社、技術部にて木材家具用塗料の開発および塗装技術指導。取締役技術部長。1999年木材用塗料メーカー、キャピタルペイント株式会社東京営業所長、現在に至る。この間、木材塗装研究会(色材協会および日本木材加工技術協会の内部組織)の運営委員として木材塗装の普及や啓蒙に努める。木工塗装一級技能士、埼玉県技術アドバイザー、東京都テクニカルアドバイザー、木工塗装中央技能検定委員
[著書]「手づくり木工大図鑑」(共著 講談社)



「森と都市の共生、いろいろな木を使う」



東京大学生産技術研究所教授 腰原幹雄氏の講演から

東京大学生産技術研究所教授の腰原幹雄氏は「森と都市の共生、いろいろな木を使う」と題して、構造の専門家としての視点からこれからの都市木造と木材の使い方の方向性を示唆した。

『都市木造』は鉄骨造やRC造を単に木造にすることではない

2012年には新国立競技場のコンペに参加して木構造のスタジアムを提案した。その時は、後に白紙撤回されたがザハ氏の案が採用された。現在は隈研吾氏設計の木材を多用した競技場が建設中である。この数年の木造に対する環境変化は大きく、最初に木造のスタジアムの設計案を出した時は、木造をあまり言わない方がいいと忠告されるほどだった。

都市木造は1950年頃から火に弱いということが進化が止まり、木造らしくならなかった。その中で唯一学校建築は1900年頃からいわゆる木造の学校施設が生まれ、およそ100年掛かったが、鉄骨造やRC造と異なる木造建築となったのである。

現在の大規模木造は大屋根の建築に終始し、トラスやアーチ、シェルなどに凝ることに留まっている。2000年の建築法改正で木造建築に広がりが出せるようにはなったが、まだどういう建築にしたら良いのかが分からない状態である。一言で言うと“木造らしいね”にならない段階、もっと言えば鉄骨造やRC造と何が違うのかが定まっていない。要するに都市木造には、新しい建築が求められているのである。どうやって木を使って建てるかが問われているのであって、鉄骨造やRC造を単に木造にすることではない。

都市型木造が一つの形になるまであと100年掛かるのか、それともこの10年で成熟していくのか、それは建築士等の皆さんがアイデアをたくさん出すことに掛かってくると思う。

『都市木造』では木という材料を見つめてどう使うかが重要

都市木造の材料についてもオーストリアなどの木造ビルのように、これからはもっと柔軟性を持った木材の使い方が必要になってくる。欧州でも構造材は針葉樹が主体だが仕上げ材に広葉樹を使ったりしている。日本では構造材の上に木を貼ると嫌がられるが、(複合や単層の)フロア材などは既にこの使い方を

している。構造材を見えるようにすると(防火の問題などで)大変になるが、いろいろな木がありそれらを組み合わせることは可能である。木という材料を素直に見つめてどう使うかが重要なのである。

木材自体も立木では根曲りなどがあるが、かつて農家型民家では曲がり材をそのまま製材して柱にしたり小屋組に生かしたりしていた。現在は大工不足や生産の効率化からプレカットが台頭して金物も普及し、直材を使った住宅建築の技術進歩が真つに進んでいる。ただ日本の木造には1000年以上の歴史があっても、同じものは造ってはいない。その時々々の価値観でいろいろなものを造っており、都市部に何を造るかは皆さんの価値観次第である。

これからは何を使わないといけなのではなく、どんな手法でもどんな材料でも使ってよいのである。逆に建築設計における創造性や柔軟性の重要度がますます高くなっていく。

『都市木造』はいろいろな木を使うところから

今はCLT(ひき板を繊維方向が層ごとに直角に交わるように貼り合わせた大型の木質パネル)やLVL(単層積層材)などの各種のエンジニアードウッドが開発され、供給が増えつつある。工法についてもRC造と木造などの混構造が盛んに行われている。構造材と仕上げ材が違っていいし、構造材もスギ、ヒノキだけでなく、広葉樹との組み合わせも考えられている。また、主伐・大径材をどう使いこなすかやヤング率の低い細材の活用などについても考えていく必要がある。

大切なのは、その時代や社会に適応させた使い方をしていくことである。現在は様々な工法が開発され、CLTなど過去にはなかった資材が生まれている。線材と面材の両面の特徴を持つ木材を他の工法と組み合わせることで、構造的な可能性が生まれる。

木材の資材としての利用についても同じで、建築から家具までデザイナーの工夫で針葉樹や構造材には不向きとされる広葉樹についても使用が可能である。いろいろな木を使うことにより『都市木造』という森と都市の共生が生まれるのである。



CLT Cafe CLT 大震動台実験部材のリユース



夢見橋 既製杉大径材を用いた橋



Timber75-1, 2 小径木(75mm角材)の組立て可能工法



下馬の集合住宅 集成材厚板のフラットスラブ構造

腰原幹雄 Mikio Koshihara プロフィール

1968年千葉県生まれ。1992年東京大学工学部建築学科卒業、2001年東京大学大学院博士課程修了、博士(工学)

構造設計集団<SDG>、東京大学大学院助手、生産技術研究所准教授を経て、2012年東京大学生産技術研究所・教授。NPO team Timberize 理事長【構造設計】下馬の集合住宅、幕張メッセペストリアンブリッジ、八幡浜市立日土小学校耐震改修、油津運河夢見橋、金沢エムビルなど。構造の視点からさまざまな材料の可能性を追求中。

【受賞】2017年第12回日本構造デザイン賞 松井源吾特別賞。2013年都市住宅学会業績賞。2012年World Monuments Fund/Knoll Modernism Prize。2012年日本建築学会(業績)。2010年土木学会デザイン賞最優秀賞(油津堀川運河)。2009年第6回木の建築賞 木の建築大賞(八幡浜市立日土小学校耐震改修)

【著書】『日本木造遺産』(世界文化社)(共著)、『都市木造のヴィジョンと技術』(オーム社)(共著)、『感覚と電卓でつくる現代木造住宅ガイド』(彰国社)



仙台で初の「アメリカ広葉樹建築家懇談会」を開催 需要者と供給者が率直な意見を交換

アメリカ広葉樹輸出協会(AHEC)では2018年10月24日(水)に仙台市内では初めてとなる「アメリカ広葉樹建築家懇談会 in 仙台」を開催しました。

今回の懇談会では、(公社)日本建築家協会・東北支部所属の建築家8名、宮城県と山形県の家具・内装材メーカーの代表者3名、宮城県の住宅メーカーの代表者1名とアメリカ広葉樹を取り扱う木材会社(本社：北海道)の代表者3名で、東北地域でのアメリカ広葉樹の内装材や建て付け家具の需要拡大等について率直な意見交換が行われました。

今回の議題は、1) 東北地域の建築家の環境建築への取り組み、2) 東北地域の建築家の木質内装材利用に対する考え方、3) 無垢内装材の加工・施工方法、4) 建築家に対するアメリカ広葉樹を含む木材製品の情報提供と供給についての4点です。

まず、東北エリアでの木造建築の動向について建築家の鈴木弘二氏(鈴木弘人設計事務所)からこの15~20年ほどの動きとして、もともとは公共建築(RC造)の内装に地元材を使うことがスタートだったが、最近は構造まで木造の動きも出ており、東日本大震災後は災害公営住宅や病院にも木造が出てきた。渡邊宏



建築家の渡邊宏氏(左)と鈴木弘二氏(右)

氏(関・空間設計)は大型の木造建築物については構造や内装で制約があり、木材の流通や製造でも制約があるのでそれを知って使うことが必要であるが、最近は積極的に木造にする動きも出てきていると環境建築についての追い風が指摘されました。

家具の環境対応については、公共施設関連ではFSCやPEFCなどの森林認証材が求められるが、全体的な物件数は少



天童木工の鈴木聡氏(右)

ない。まだまだ不透明な部分が多いが東京五輪やクリーン・ウッド法への対応などで認証材需要が増える可能性はあると言うのは、天童木工の鈴木聡氏。

参加の木材業者からは、フローリングで生き節を使いたいという要望もあり、無地・無欠点材だけではなく設計士などと打ち合わせを大事にして納品している。ただ人工乾燥材を国内で養生して納品するため、図面が固まって半年から1年の時間は必要になる。

一方、先述の鈴木弘二氏からは建築家側には意外と正確な情報が入手しにくい。普段は同業者や現場で確認するが、中には即座に調達できない木材サンプルもある。自分で見て触ったものしか信用できないので現物が確認できるよ

うにして欲しいという要望がありました。

参加の木材業者から「支店や営業所には在庫があるので、サンプルも1週間あれば届けられる」「木材業者に問い合わせれば貰えば対応できる」との回答がありましたが、まだまだ東北地域では馴染みの薄いアメリカ広葉樹を今後どのような方法で入手し、建築内装に取り入れて行くのか、細かな面も含めて話し合われました。さらに、建築家からは、木材流通が複雑なため、使いたくても最終価格が見通しづらいので躊躇してしまうとの指摘もあり、供給サイドの今後の課題といえそうです。

協会ではアメリカ広葉樹を扱っている木材会社の情報が必要な場合には、ご連絡いただければ、各地の木材会社をご紹介していることをお伝えしました。

懇談会後の懇親会では建築家の方々と木材業界の方々とさらに踏み込んだ意見交換が行われ、東北地域での今後のアメリカ広葉樹の需要拡大につながる事が期待される懇談会となりました。





北海道の名建築から家具工場、木材会社まで 盛り沢山の「アメリカ広葉樹北海道見学会」を開催

2018年5月22日(火)～23日(水)、アメリカ広葉樹輸出協会(AHEC)は、(公社)日本建築家協会(JIA)関東甲信越支部・住宅部会と「アメリカ広葉樹北海道見学会」を開催しました。参加者は同部会所属の建築家13名。

最初の訪問先は日本のモダニズム建築の代表作の一つで世界の残すべき近代建築100選にも選ばれた札幌市内の「上遠野邸」。建築家の上遠野徹氏(Katono Tetsu 故人)の自邸として1968年に竣工。ご子息で建築家の上遠野克氏にご説明頂きました。現場溶接されたコルテン鋼のフレームとわざと不ぞろいのものを使ったレンガ壁の対比が素晴らしい建物でした。広い庭に囲まれ、一方が全面ガラスの開放的な空間の佇まいには参加の皆さんも感嘆しきり。

続いて2008年に当協会がエコ・インテリアプロジェクトとして取り組んだ札幌市内の「遠藤歯科クリニック」を訪問。設計者のヒココニシアーキテクチャ(株)の小西彦仁氏にご説明頂きました。ここの見所は、床から壁、天井までを包み込むようにウォルナット、チェリー、ホワイトアッシュ、ハードメープルの4種類のアメリカ広葉樹がランダムに張られた待合室の内装です。色違い

や節などのキャラクターマークだけでなく、それぞれ乱巾、乱尺の4種類の樹種の材を使いながらデザイン性を追求した試みはまるで森の中のように感じる空間です。竣工後10年の経年変化によりさらに味のある内装になっていました。また、寒冷な気候に対応するための床暖房を始めとする暖房設備にも割れやあばれも見られず、十分対応していることが証明されました。

その後、札幌市内のホテルにてJIA北海道支部・住宅委員会所属の建築家11名、在札幌米国総領事館の2名が加わり「アメリカ広葉樹建築家懇談会 in 札幌」を開催。ジャスティン・トール領事の開会挨拶の後、それぞれの地域や気候による建物の違いや施工方法等、さらには関東・北海道地域での環境建築の取り組みについて意見交換が行われました。またアメリカ広葉樹を含む木質内装材利用に対する考え方、木材製品の情報提供の方法についてなどのパネルディスカッションが行われ、話はレセプションにも続きました。

2日目は、旭川市に移動、昭和木材(株)の旭川工場を見学しました。大雪連峰を望むヤードには所狭しとアメリカ広葉樹などの丸太が貯木され、沢山の製

材が天然乾燥されていました。木材加工工程では、多種多様な材が顧客ニーズに合わせて出荷されており、取扱いの多さや規模の大きさに驚きました。次いで道内最大手の家具メーカー、(株)カンディハウス本社を訪問。参加の東京の建築家と旭川家具工業協同組合、北海道広葉樹協議会の皆様とのランチレセプションを開催しました。在札幌米国総領事館のレイチェル・ブルネット・チェン首席領事の挨拶後、各参加者が現在のアメリカ広葉樹の輸入状況や市場について、アメリカ広葉樹で製作された家具の販売状況、逆に東京での木材製品のトレンドなど短い時間にもかかわらず多くの情報交換が行われました。その後、家具の製造工程とショールームをご案内いただきました。細部にまで丁寧に仕上げられた家具はどれもアメリカ広葉樹の魅力が活かされた素晴らしい家具でした。

最後に、前日にプレゼン頂いた3名の北海道の建築家設計の寒冷地の環境に対応した住宅を見学、バスツアーを終えました。協会ではこうした活動を通して建築家やデザイナーにアメリカ広葉樹の良さを認識していただき、木材会社との橋渡しをすることでアメリカ広葉樹の需要拡大に努めています。

ご希望の品質のアメリカ広葉樹製材を入手いただくために アメリカ広葉樹の格付等級をご理解ください

日本でもアメリカ広葉樹を使いたいとおっしゃる方が増えています。ただ国産材と規準が違うので解りにくいと言われてしています。そこでアメリカ広葉樹輸出協会(AHEC)ではアメリカ広葉樹の等級格付に対する考え方を理解していただけるよういろいろな方策を進めています。

その一つが「アメリカ広葉樹製材等級格付イラストガイド」の新刊の発行です。もう一つは、全米広葉樹製材協会(NHLA)発行の「NHLA Rulebook」の日本語版「等級格付規則集」の発行です。さらに全米広葉樹製材協会(NHLA)の主席等級検査官であるデナ・スペサート氏を講師に招き、地元の木材問屋にご協力をいただいて、アメリカ広葉樹製材の現物を会場に持ち込み、参加者が講師の説明を受けながら実際に作業する体験型ワークショップも実施しており、昨年は福岡と静岡で開催いたしました。



当規則は今から100年以上前、結成されたばかりの全米広葉樹製材協会(NHLA)により設定されたものですが、世界中に2,000以上の会員を有するようになった現在も米国広葉樹産業界の規準であり、輸出製材等級格付の基本となっています。

天然素材である木材は、自然の恵みであるため様々な自然の特性や欠点を持っており、それを理解し、許容しながら使い分けなければなりません。そのため

に製材工程で製材を等級格付することにより、各々の製材の価値と用途がおおよそ決まります。

このNHLA等級格付規則は、広葉樹製材取引において売買両者いずれにも明らかな共通言語を提供するものです。本来の対象は米国市場ですが、希望する品質の米国産製材を入手するためには、海外のバイヤーもそれについての適正な知識が必要となってきます。

木材加工業においては、仕入れた材の等級がコストと材料歩留りを決定します。広葉樹製材は通常、木製品の材料としての使用を前提に、製材から木取できるカッティング(cutting)の寸法と数を基本として等級格付します。NHLA等級格付規則は本来家具での使用を想定し、クリアで欠点のない材面の歩留りによって各等級が策定されています。高い等級の材からは長尺のクリア材が取れますが、コモン等級の材は短尺のクリア材を木取りすることを想定しています。

No.1 コモン(No.1C)および No.2A コモン(No.2AC)を中心とするコモン等級材は、キッチンキャビネット、家具部材、フローリング材などに最も適しています。注目すべきは、コモン等級材を挽き直すことで、上級材とまったく変わらないクリアなカッティングを取ることができることです。違いは材寸が小さい、すなわち細くて短いカッティングとなることです。等級はあくまでクリア材の歩留

りを表すものであり、広葉樹に見られる美しく、自然な特長の多くはクリア材の計算においては考慮されていません。

「アメリカ広葉樹製材等級格付イラストガイド」では、主要な広葉樹9樹種について、おもな等級には写真により自然の材面の美しさも詳しく説明しています。

日本語版「等級格付規則集」では、専門的な内容のアメリカ広葉樹材の格付方法を100ページを用い、可能な限り分かりやすく日本語で解説しています。

いずれの冊子もご希望の方に無料でお送りしています。ホームページからお申し込みください。

一方、体験型ワークショップですが、米国の全米広葉樹製材協会では数週間かけて実際に作業をしながら学ぶ内容であり、通訳を介して約2時間で理解すること自体無理といえますが、アメリカ広葉樹の等級格付についての基本的な知識は得ていただけるのではないかと思います。

米国の温帯広葉樹林は同種の森林資源としては世界最大で持続可能性という点でも際立っています。コストと歩留りの両面で今後さらに木材の価値を最大に引き出していくためには、コモン等級の活用を可能な限り進めることが重要です。こうした努力が、数世代に渡って引き継がれていく持続可能な森林資源の実現につながります。



ホームページのご案内

www.ahec-japan.org/

ホームページでは、アメリカ広葉樹輸出協会の活動状況、樹種に関する説明、その他アメリカ広葉樹についての最新の情報をご提供しています。



パンフレットのご請求

アメリカ広葉樹に関する様々な情報満載のパンフレット、各種資料をご用意しています。左のホームページにてご請求ください。無料です。



左から、樹種解説、製材等級格付イラストガイド、内装材としてのアメリカ広葉樹ハンドブック。他の資料についてはホームページでご確認ください。

アメリカ広葉樹輸出協会 American Hardwood Export Council (AHEC)

〒530-0047 大阪市北区西天満2-11-5 アメリカ総領事館内 Tel. 06-6315-5101 Fax. 06-6315-5103